

「東大寺の研究」

「特にその創建をめぐつて」

常 塚 紀

我が国では、聖德太子以来朝廷は常に仏教を奨励してきたのである。朝廷は自ら仏教に帰依し、仏教興隆を政治の一端として行かれたのである。これにより国家の災害を除き、国家安泰を願つたのである。このような政教一致、正法治国の思想は藤原朝より漸次行われ来たのであるけれど国分寺の建立の詔を発せられるに至つてはその完成期であると思う。そして大仏像造に至つてその最終的目標であつたのである。

国分寺、尼寺建立の詔は統紀によれば天平十三年三月廿四日乙巳、と有るが三代格によれば天平十三年二月十四日の誤りであるとする説と、十年頃であるとする説とがあり、明らかではない。私はともかくともその年月とは別にその各々（統紀、三代格）の内容についてその背景を知る事が目的であるので見て行くなかに、おのずと

大仏像造の詔と国分寺、尼寺の建立の詔の誤いを知る事が出来たのである。それは国分寺は天平十年前後に多発した、災害、病氣等の原因により死んだ藤原一族及び政治を司る天皇の近臣の死と皇太子の死等の不幸であり、その消滅を祈るのが根本目的であり、この願望が遂に国分寺の建立となつて現れたのであるが、大仏像造の背景は天平十五年十月十五日辛巳の詔、天平勝宝元年十二月丁丑の詔、によつて国分寺のそれとは別に国家社会の為に社会不安を消滅することがその中心であつたと思うのである。天平勝宝元年十二月の詔に天皇は河内の智識寺に行幸して、その本落を拝して知識の尊い事を知つたのである。それは国分寺制度の進展の思わしくない事と政治的には、政治的諸勢力の対立等による社会不安と國際的には対中国、朝鮮との対立によるのであつたと思われるのである。

古代社会に於いては宗教と政治は密接不可分の關係にあつた事と中央集権化されつつある政治体制に対して天皇は政治上の支配者であると同時に宗教上に於いても最高の存在である事を願つたのである。即ち自らの発願に

より自らの手でその大仏の完成を願つたのであつた。そして発願後の遷都等重なる苦を乗り越えて、ついに天平勝宝元年十月廿四日遂に竣工の功を奏したのである。三ヶ年八度鑄造の後大願成就したのである。そこで天平勝宝四年三月十四日、聖金を初め完全に出来ぬ間に開眼供養が行なわれたのであつた。では各々の問題点について国分寺の講説した教典は金光明最勝王経を根本教典とするに對して、大仏像造はこれらに華嚴經、梵網經の思想が含まれていると思うのである。そして共に中國の元興寺等の影響によるもので、朝廷としてはそれらに張合うという事も多少あつたのでないかと思う。

最後になつたけれど、この二つの大事業の影の人物は光明皇后であると続紀の天平宝字四年六月七日乙丑の記光明皇后の崩御の条に記してあるのである。しかしこの点に關しては歴史学者は取り上げてはいるものの、あまり問題としていないのは誤りではなく光明皇后のみか、その影の人物ではなく天皇、皇后一体の願いであるから一方だけを問題には出来ないからだとも思う。しかし光明子の一族即ち藤原四兄弟の死によつて、その事業に熱

心であつたかは知ることが出来るのである。又光明皇后のその後の社会事業に對す理解によつて知る事が出来るのである。

ともかく大くの未解決の問題を多く残している国分寺東大寺の問題は分後の研究にまつことにしたいと思う。東大寺大仏像造により、現実的な國の政治——古く聖德太子からの念願であつた朝廷中心の中央集権統一國家——をより位置づけるためにも重要な意義があつたのである。我が國の文明文化は仏教により出来、仏教の力により発達し仏教の力により維持されて來たと云えるであろう。

私は今日ある文明——政治、經濟、文化、社会等總ての面に關係のあつた日本仏教、今日有る生活の基本となつた古代社会の基を幾分なりとも究明したかつたのである。

